

乳幼児をもつ母親の育児ストレスに関連する要因とアート作品制作の効用

Mariko Fujita, Toshiyuki Sugai and Shin-ichi Yoshioka

抄録

背景 乳幼児をもつ母親の育児環境の孤立による育児ストレスに対する母親への支援の重要性が指摘されている。子育て中の母親の育児ストレスの緩和や育児支援の充実を図るためには、母親の育児ストレスに影響する要因を明らかにすることが重要である。本研究では、アート作品制作に参加した母親を対象に、制作方法や作品制作の自己評価と母親の育児ストレスに関連する要因を明らかにすることを目的とした。

方法 本研究では、アート作品制作の講習会に参加した母親 140 人を対象とした。単独制作をした 3 歳未満の子の母親 70 人 (A 群) と 3 歳以上の子と共同制作をした母親 70 人 (B 群) の 2 群とした。無記名自記式調査票を配付し回収した。調査内容は、属性、アート作品制作経験回数、作品制作の自己評価、育児ストレスとした。

結果 調査票の回収数は 140 人 (100%) で、有効回答数は A 群 65 人と B 群 54 人の 119 人 (85%) であった。育児負担感得点の平均値は B 群が有意に高かった。重回帰分析の結果において、育児負担感合計得点に関連があった要因は、全体および A 群においては子の年齢と子のきょうだいの有無であり、B 群においては作品制作の自己評価の「作品に対する自信」であった。

結論 本研究において、母親の育児ストレスには子の年齢と子のきょうだいの有無が関連することが示唆された。アート作品制作を子と共同で行った母親に、育児ストレスと「作品に対する自信」との関連が示唆された。

キーワード アート作品制作;育児ストレス;乳幼児;母親

日本では少子化の進行や核家族化、地域社会のサポート機能の低下により、育児環境の孤立が問題¹となっている。母親の育児ストレスに関連した研究では、母親への支援の重要性が指摘され、支援方法についての検討が進められている。2017 年の総務省の調査²では、6 歳未満の子どもをもつ母親の一日の育児時間は年々増加の一途をたどり、今後も更なる母親の負担増加が懸念される。子どもを生きがいに感じている母親³や、育児を楽しみながら行っている一方で、母親にとって育児はストレスフルな出来事⁴とされている。育児に関するストレスは、母親の不安や抑うつ⁵の予測要因である⁵ことが明らかにされており、母親の抑うつは児のネグレクトや虐待と関連する^{6,7}ことも報告されている。また、育児ストレスは、親の感受性の低下、および子どもに対する侵入と敵意の増加と関連している⁸ことを示した研究報告もある。このことから、育児ストレスへの対処法として、母親の感受性を育む方法や、母親が子どもとの適切な心理的距離感をもてる機会や方法の検討が、母親の心理的健康の維持・向上⁹のために必要であると考えられる。

近年、心身の健康を回復する心理療法として、さまざまなアートでの表現活動、創作活動に従事するアートセラピーが注目されている。アートセラピーとは、フランスの精神科医の Jean-Pierre Klein¹⁰によれば、「芸術的媒体を用いた心理療法と定義できるであろう。芸術と

治療が補完し合い、より豊かなものとなって共通の視点を探るのが芸術療法である。」とされている。そして、アートセラピーは、ストレス軽減、自己理解、他者理解、自己評価の向上、想像力の増大などに効果がある¹¹ことが示されている。アートセラピーの理論的根拠は、創造的なプロセスが本質的に治療効果を持つというものである¹² (Pratt, 2006)。その根底には、芸術表現が、最終的な成果物だけに関わるのではなく創作の過程と最終製品が共に重要な精神的プロセスを促すという考えに基づいている¹³。海外の研究では、心身に障害のある子ども¹⁴や、うつ病をもった親¹⁵、および学童期の子をもつ親¹⁶を対象としたアートセラピーの効果の報告が散見される。幼児と母親と一緒に経験する創造的で感覚的な絵画活動が、母子の新しい前向きなつながりを促進する¹⁷ことが示された。また、学童期の子を対象に行った研究では、言葉による表現に比べ、絵による表現の情報量が多かった¹⁸とする報告もある。このことから、子どもたちとのコミュニケーションを促進する手段としてアートを使用する関心が高まっており、描画が臨床および研究の両方で子供たちに最も頻繁に提供されている¹⁹。いずれの研究でも、親子関係や子どもの自己認知にポジティブな影響を与えることが示唆されている。

日本におけるアートセラピーに関する研究は、学童にとってアート活動を行うことは自分を取り戻すための自己対象体験となり得た²⁰こと、アートセラピーによって子どもの夜泣きが軽減した事例²¹が報告されている。また、親子での創作活動に関する研究では、母子が集団で造形活動を行う²²ことで育児ストレスが軽減したとの報告がある。しかしながら、乳幼児をもつ母親もしくは母子を対象として、アートセラピーや創作活動と育児ストレスとの関連をテーマとした研究は見当たらない。

そこで、今回、母子で自宅でも手軽に取り組める手形足形アート（以下、手形アートと示す。）に着目した。手形アートは、子や母親の手形や足形を作品の一部として用いていることから、単なる絵や版画ではなく、母子関係が育まれる暖かみの伝わるアート技法である。作品は子の成長記録としての記念や贈答品として用いられ、手形・足形を基に動物や植物などをモチーフにした作品の中に、制作者である母親の思いを投影できるアート作品である。手形アートは、専用の制作キットも販売されるなど、近年では一般的に広く認知されはじめている。

本研究において、作品制作の自己評価は、Keller²³が提唱したARCSモデルを参考に、自作した7項目の質問を用いた。ARCSモデル²⁴は、注意（Attention）、関連性（Relevance）、自信（Confidence）、満足感（Satisfaction）の4つの概念から構成されているインストラクショナルデザインである。このモデルは、学習意欲を評価するモデルであることから、本研究においては対象者の作品制作への意欲を評価する指標として用いて、作品制作への意欲と育児ストレスとの関連を検証することとした。

今回の調査では、育児ストレスを測定する尺度として「育児負担感指標（Parenting Strain Index : PSI）」^{25,26}を用いた。この尺度は、育児に関連したネガティブなストレス認知である育児負担感の基本内容を、育児に伴う母親自身の社会活動制限（以下、社会活動制限と示す。）

と母親の児に対する否定的感情の認知（以下、否定的感情の認知と示す。）に限定している。本研究では、育児ストレスのなかでも母親の心理的健康に影響する要因に着目したことから、母親の子どもへの否定的な感情の認知に関する内容が含まれる当該尺度を使用した。また、質問項目が8項目で項目数が少ないことから、調査対象の母親への負担を考慮し、当該尺度を使用した。

本研究では、アート作品制作講習会に参加した母親を対象に、母親が単独で制作した群と母子が共同で制作した2群において、制作方法や作品制作の自己評価と母親の育児ストレスに関連する要因を明らかにすることを目的とした。3歳から5歳の幼児後期は、エリクソンの発達段階において自立性が育まれ、自分で考え、行動するようになる期間である²⁷。そして、この時期になると、幼児のかく図形がものの形として識別でき、児が色相の違いを知覚することができるようになる²⁸ことから、3歳から5歳の子を母親と共同制作が可能な年齢として捉えた。

方法

対象者

本調査は、2020年7月から10月に実施した。本調査の対象は、アート作品制作の講習会に参加した母親140人である。母親の育児ストレスと作品制作方法との関連をみるため、対象をA群とB群の2群とした。A群は作品制作を単独で行う母親70人で、B群は子と共同で制作を行う母親70人である。A群の母親は0歳から3歳未満の子と参加し、B群の母親は共同で作品制作が可能な3歳から6歳未満の子と参加した。A群B群いずれの群の対象者も母親と子1人を1組として参加した。

調査方法

研究者から手形アート作品制作講習会の講師と、A市内の大型商業施設2施設や保育園の責任者に依頼し、研究説明と研究依頼を記載した研究参加募集のフライヤーを配布してもらい参加者を募った。対象者は、フライヤーを読み研究の趣旨を理解し、自主的に作品制作に参加した。作品制作終了直後の母親に対して無記名自記式質問紙調査を行った。調査票は作品制作終了直後に講師から配付した。母親は回答後に講習会会場に設置した回収箱に調査票を自ら投函した。調査票の内容は、基本属性、手形アート作品制作講習会への参加回数、作品制作に関する自己評価、育児ストレスであった。講習会はA群とB群それぞれ異なった大型商業施設のイベントスペースで開催した。講習会の開催回数はA群が4回で、B群は3回であった。1回の講習会に参加した母親の人数は11人から33人であった。講師は、対象者に必要物品を配付し、作品制作の方法を説明した。作品制作の内容は、母親が子の手形や足形をスタンプインクで画用紙にとり、動物をモチーフにしてマスキングテープを切り貼りし、模様を書き込むことで作品を制作した。母親は作品の見本を参考にした。作品制作の所要時間は約1時間であった。A群の母親は、一緒に参加した子の足形をとった後は一人で作品制作を行った。B群の母親は、参加した子の手形をとった後も母子が共同で

自由に制作した。

基本属性

対象者の基本属性は、母親の年代、参加した子の年齢（月齢）、子のきょうだいの数、子の出生番数、世帯構成とした。

作品制作の自己評価

作品制作の自己評価の質問の構成について、注意（Attention）は「作品制作に対する興味」と「自宅での作品制作の意思」の2項目、関連性（Relevance）は「講習会の有意義感」と「子の成長の実感」の2項目、自信（Confidence）は「作品に対する自信」の1項目、満足感（Satisfaction）は「講習会に対する満足感」と「作品に対する満足感」の2項目とした。「自宅での作品制作の意思」は3段階で評価し、他の6項目は4段階で評価した。調査対象者は、各質問に対して、最も当てはまる選択肢を選び回答した。

育児ストレス

育児ストレスは、中嶋らが開発した育児負担感指標¹²を用いて測定した。この指標は、信頼性と妥当性が確立された尺度である。育児負担感指標は、「社会活動制限（appraisal of limitation on social activities）」と「否定的感情の認知（appraisal of negative emotions）」を一次要因、「育児負担感（parenting strain）」を二次要因とする二次要因モデル¹³である。一次要因はそれぞれ4項目で構成され、二次要因は8項目で構成されている。この指標は、最近1か月間の状況を尋ねている。調査対象者は、各質問に対して、最も当てはまる選択肢を選び、それらを5段階のリッカート尺度で回答する。5段階のリッカート尺度（0：まったくない、1：たまにある、2：時々ある、3：しばしばある、4：いつもある）で回答した合計点を得点とした。育児負担感得点は0点から32点までとなり、社会活動制限得点と否定的感情の認知得点はそれぞれ0点から16点までとなり、数値が高いほど育児負担感が高いことを意味する。本研究における育児負担感得点におけるCronbachの α 係数はA群・B群0.81、A群0.82、B群0.79であった。

分析方法

記述統計学を用いて分析した。属性、作品制作に関する自己評価、講習会参加回数、育児負担感得点をA群とB群で比較した。作品制作の自己評価は、7項目についてそれぞれWilcoxonの順位和検定を用いA群とB群を比較した。作品制作の自己評価は、評価が高いほど高得点となるよう3段階評価項目は1点から3点とし、4段階評価項目は1点から4点を配点した。この得点を用いて、A群B群全体、A群、B群において、自己評価各項目と育児負担感尺度得点との関連をみた。

育児ストレスは、育児負担感得点、社会活動制限得点、否定的感情の認知得点において、それぞれの平均値をA群とB群で比較した。育児負担感得点において、Shapiro-Wilk検定を用いて正規性の検定を行った結果、正規分布に従わなかったため、ノンパラメトリック検定を用いた。2群間の比較にはMann-WhitneyのU検定、3群間以上の比較にはKruskal-Wallis検定を用いた。3群間以上の比較で有意差のあった項目では多重比較を行った。母親の年代、

子の兄弟の有無、講習会初回参加者については、A 群内、B 群内それぞれで育児負担感得点を比較した。子の年齢については、世帯構成と育児負担感得点について Spearman の順位相関係数を求めた。

従属変数を育児負担感得点とし、独立変数を母親の年代、子の年齢、子のきょうだいの数、子のきょうだいの有無、世帯構成、作品制作方法、作品制作経験回数、作品制作の自己評価 7 項目として重回帰分析を行った。連続変数以外はダミー変数化し分析した。

統計処理には統計ソフト SPSS Ver26 を用いた。検定の有意水準は 5%とした。

倫理的配慮

調査対象者は、調査の概要、目的、方法を説明した研究参加者募集の文書を読んで自ら参加した。倫理的配慮については、研究参加者募集の文書において、対象者の参加はあくまで任意であること、制作途中での撤回は可能であるが調査票提出後の撤回はできないこと、調査結果は記載した目的以外には使用されないこと、などを説明した。また、対象者は調査票に記入し、提出した場合に同意が得られたとみなした。

対象者の研究関連データを入手する権利は保証され、質問がある場合には研究者の連絡先が書面に記載されていた。調査は匿名とし、データは個人が特定できないように符号化した。データは、統計的に集計して分析した。本研究は、広島大学疫学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（第 E 2019-1929 号）。

結果

調査票の回収数は 140 人(100%)で、有効回答数は A 群 65 人と B 群 54 人の 119 人(85%)であった。

属性

対象者の属性を表 1 に示す。母親の年代は 30 歳代が最も多く、A 群 64.6%、B 群 70.4%であった。子の年齢は A 群が平均 0.94 ± 0.54 歳(1 か月～2 歳 8 か月)で、B 群は平均 4.44 ± 0.87 歳(3 歳～5 歳 11 か月)であった。子の年齢別人数は、0 歳 42 人、1 歳 18 人、2 歳 5 人、3 歳 18 人、4 歳 18 人、5 歳 18 人であった。子のきょうだい「いる」は A 群 24.6%、B 群は 77.8%であった。世帯構成は核家族が最も多く、A 群 95.4%、B 群 87.0%であった。

育児負担感得点の比較および対象者の属性との関連

A 群 B 群全体の平均値は、育児負担感得点 10.10 ± 5.11 、社会活動制限得点 5.69 ± 2.82 、否定的感情の認知得点 4.43 ± 3.30 であった。

育児負担感得点の平均値は A 群 8.48 ± 4.60 、B 群 12.06 ± 5.04 で、B 群が有意に高かった ($P < 0.01$)。社会活動制限得点は A 群 5.37 ± 2.77 、B 群 6.07 ± 2.86 で、有意差は認められなかった。否定的感情の認知得点は、A 群 3.11 ± 2.72 、B 群 6.02 ± 3.25 で、B 群が有意に高かった ($P < 0.01$)。

母親の年代について、育児負担感得点は、A 群では 30 歳代が 20 歳代以下に比べ有意に高かった ($P=0.038$)。しかし、B 群では有意差は認められなかった。

子どもの年齢と育児ストレスの関連を、A 群、B 群それぞれで比較した。A 群において、

1歳児の母親は0歳児の母親に比べ、育児負担感得点 ($P=0.015$) と社会活動制限得点 ($P=0.030$) が有意に高かった。否定的感情の認知得点は2歳児の母親が0歳児の母親に比べ有意に高かった ($P=0.020$)。しかし、B群においては、子の年齢による育児負担感に有意差は認められなかった。

子のきょうだいの有無について、A群において、子のきょうだいがある母親は子のきょうだいがいない母親に比べ、育児負担感得点 ($P=0.023$) と否定的感情の認知得点 ($P=0.047$) が有意に高かった。しかし、B群において子のきょうだいの有無による育児負担感に有意差は認められなかった。

世帯構成と育児負担感得点にA群、B群ともに有意な相関は認められなかった。

講習会参加回数

作品制作経験回数は、A群が1回以上30人 (46.2%)、0回35人 (53.8%) で、B群は1回以上2人 (3.6%)、0回51人 (96.4%) であった (表2)。

作品制作の自己評価

作品制作の自己評価は、「作品制作に対する興味」、「自宅での作品制作の意思」、「講習会の有意義感」、「子の成長の実感」、「作品に対する自信」、「講習会に対する満足感」、「作品に対する満足感」の7項目のうち、「講習会に対する満足感」について「とても満足した」と回答した者の割合がA群に有意に多く ($P=0.021$)、「作品に対する自信」について「とてもうまくできた」と回答した者の割合はB群に有意に多かった ($P=0.002$) (表3)。

講習会参加回数と育児負担感得点との関連

初回参加の母親において、B群がA群に比べ、育児負担感得点 ($P<0.001$) と否定的感情の認知得点 ($P<0.001$) が有意に高かった (表5)。

作品制作の自己評価と育児負担感得点との関連

作品制作の自己評価7項目と育児負担感得点において、A群B群全体およびA群で相関は認められなかった。B群の「作品に対する自信」と育児負担感合計得点 ($r=-0.359, P=0.008$)、否定的感情の認知得点 ($r=-0.409, P=0.002$) に負の相関が認められた。

育児負担感得点と関連する要因

従属変数を育児負担感得点とし、独立変数を属性、作品制作方法、作品制作経験回数、作品制作の自己評価として、ステップワイズ法を用いた重回帰分析を行った。A群B群全体において育児負担感得点に影響する要因は、子の年齢 ($\beta=0.305, P<0.01$) と子のきょうだいの有無 ($\beta=0.242, P<0.05$) であった。A群においては、子の年齢 ($\beta=0.401, P<0.01$) ときょうだいの有無 ($\beta=0.355, P<0.01$) であった。B群においては作品制作の自己評価の「作品に対する自信」 ($\beta=-0.362, P<0.01$) との関連が示された。いずれの回帰式も決定係数が0.5以下であったため、適合はよくなかった。(表6)

考察

本研究では、乳幼児の母親を対象に、2種類の手形アートワークの制作スタイルを比較し、

育児ストレスを調査した。

本研究においては、作品制作を母子共同で行った B 群が、単独制作した A 群に比べて、母親の育児負担感得点が高かった。育児負担感指標を用いた先行研究において、就学前の児を育児している母親 229 人を対象とした調査²⁶では、育児負担感得点 9.7 ± 5.91 、社会活動制限得点 5.3 ± 3.76 、否定的感情の認知得点 4.4 ± 3.01 の結果であった。先行研究の結果と比較すると、本研究における育児負担感得点は A 群が低く、B 群は高い値となった。育児負担感指標の一次要因では、母親の児に対する否定的感情の認知得点が B 群に有意に高かった。しかし、育児に伴う母親自身の社会的活動制限得点は、A 群と B 群の間に差がなかった。

先行研究において、幼児期の後期および就学前の早期は子どもの外在化行動のレベルが安定しないこと²⁹、子どもの粗大運動能力の進歩による大きな身体的自立および自律性を示す一方で感情調節能力は未発達であるため、親が子どもの行動の意図に対する理解に困難を生じることによってストレスを抱えやすい³⁰ことが報告されている。さらに、子どもの年齢による育児困難度の比較では、3 歳³¹と 4 歳^{32,33}の育児困難度が顕著に高いことが報告されている。本研究では、0 歳児と比較して 1 歳児の母親で【育児ストレス】スコアが有意に高かった。しかし、B 群では、【育児ストレス】得点に年齢間の有意差は認められなかった。これは、乳幼児期後半に子どもとの共同作業で作品制作を行う B 群の母親の育児ストレスが高いことと関連している可能性がある。A 群において、子のきょうだいが「いる」母親は、「いない」母親に比べて、育児負担感得点が高かった。この結果は、先行研究による、子どもが 1 人よりも 2 人以上いる場合に育児への負担感が高い^{25,34,35}結果と一致する。また、0 歳児の母親に比べて、1 歳児の母親は社会活動制限得点が高く、2 歳児の母親は否定的感情の認知に関する育児負担感得点が高かった。1 歳児はよちよち歩きをはじめ心身ともに著しい成長を遂げる時期であることから、0 歳児に比べて母親の社会活動が制限されやすい状況であることが推測される。また、2 歳児は運動面の発達や社会的発達が著しい時期であり、精神面においても自我の芽生えとともに第一反抗期が始まる時期である。そのため、母親にとって、児の自由気ままな行動や態度に振り回されるストレスも大きく³⁶、子どもに対するコントロール不可能感³から児に対する否定的感情をもちやすいと考えられる。そして、子どもの年齢が 0 歳から 3 歳までの年齢のうち、1 歳以上 3 歳未満の子どもを育てる母親に育児ストレスの要因が多い³²ことから、0 歳児をもつ母親に比べて、1 歳児と 2 歳児の母親は、育児ストレスが高いことが考えられた。これらのことから、乳幼児をもつ母親の育児ストレスには、子の年齢と子のきょうだいの有無が関連していると考えられた。

今回の研究においては、作品制作の自己評価の結果から、A 群 B 群の母親ともに、いずれの評価項目に対しても評価が高かった。このことは、作品制作に意欲の高い対象者であったと考えられた。評価項目 7 項目のうち講習会に「とても満足した」と回答した者の割合が A 群に有意に多く、作品は「とてもうまくできた」と回答した者の割合は B 群に有意に多かった。講習会にとても満足した者が A 群に多かったことは、講習会に関してモチベーシ

ョンの高い母親が参加していたと推測できる。その理由として、B 群の 9 割以上が初回参加者であったことに対して、A 群は約半数がこれまでに複数回参加したリピーターであったことが挙げられる。A 群の母親は作品を制作することに対する自己評価が高く、再度の参加となったことが推測された。これまでの研究によると、育児中の母親は、自分の時間がなく²⁹、自分の時間がほしい³⁸といった要望があることから、家事や育児に時間が取られることが多く、自分のことに使える時間がないことが育児ストレスの要因に影響することが示めされている。一方で、育児ストレスを軽減するには、母親一人の時間の確保が重要^{39,40}であることや、趣味がある母親に育児ストレスを感じていない者が多い⁴¹ことが報告されている。日本の高齢者を対象とした大規模調査⁴²では、趣味の「ある」者は「ない」者に比較して心理的側面が良好な者が多い結果であった。一般的なストレス対処として趣味などの自分の好きなことにうちこむ時間をもつことが有効である⁴³ことも示されている。本研究において、A 群の母親のうち約半数が作品制作を複数回経験していたことから、A 群には講習会での作品制作を趣味や自分の時間として捉えている者の割合が多いことが推測された。一方で、A 群の母親に比べて、初回参加者の多い B 群に、制作した作品に対する自信の自己評価が高い母親の割合が多かった。A 群は、制作経験者の割合が多かったことから、これまでに制作した作品と比べて今回の作品を評価した母親がいた可能性が考えられた。それに対して、B 群は、初めての経験にも関わらず、期待どおりの作品ができたと認識した母親が多かったと推測される。また、B 群においては、「作品に対する自信」が強い母親ほど、児に対する否定的感情の認知による育児ストレスが低い結果が示された。Keller²⁴は、「自信の特徴の 1 つは制御の認識であり、人々は事象に対して、ほとんどまったく制御がきかないと信じて、ストレスに関係する感情を経験すること、制御の認識を高める方法として何が期待されているかを理解できるように支援し、成功する確率を最大限に引き出すことが必要であること、そのために、いくつかのゴールや目標を自分自身で決めるように促すことで、人々の自信はより高くなる傾向にある。」と示している。これらのことから、子どもとの共同で制作した作品に自信がもてる母親は、その制作過程においても肯定的に捉えていたことが考えられた。また、参加者は作品の見本を参考にしながらも、自由度のある制作内容であったことから、自分たちの能力や努力で作品を完成させたと認識できたことで作品への自信となったと考えられた。そして、「作品に対する自信」が強い母親ほど、日ごろから、共同制作した子との関係に折り合いをつけることができていると推測されることから、児に対する否定的感情による育児ストレスが低いと考えられた。

参加者全員において、作品制作の自己評価が高かったことから、手形アート作品制作は、母親にとって好ましい有意義なこととして認識されたと考える。育児においては日々の生活上のできごとがストレスとなりやすい⁹ことから、アート作品制作という非日常的な経験を通して、母親が自分自身や子の新たな一面に気付くきっかけとなり得る。手形アートは、作品に子の身体の一部の形をモチーフとして使用することから、母親がわが子の成長を実感できる機会になり得ることや、母子ともに作品に愛着をもてることが特長として挙げら

れる。アートを使って世界と自分の関係を見る方法を学び、その結果、子どもと自分自身に自信を持てるようになる¹⁶ことで、母親と子の間の新たな関係性への気付きとなる可能性が考えられた。アート作品制作の方法としては、乳児期から幼児期前期の子どもをもつ時期や、幼児期後期において共同制作がストレスと感じる母親にとっては、自分だけの時間として取り組める単独制作とし、母子ともに共同制作を楽しめる場合には共同制作することが望ましい。そして、母親または母子の自由な発想を活かせる作品の制作に取り組むことにより作品への自信を高めることで育児ストレスを軽減することが期待できると考えられた。

本研究には結果の解釈において、限界がある。1つ目は作品制作前後で調査していないことである。また、前後調査を行う場合は、短期的な変化を測定する必要があるため、育児ストレスの強度を測定できる尺度を使用する必要がある。2つ目はA群が足形、B群は手形を用いるといった異なる作品を制作したため、共通の制作内容で比較する必要があること、3つ目に調査票の内容以外の要因との関連が検討されていないことである。

結論として、乳幼児をもつ母親の育児ストレスには子の年齢と子のきょうだいの有無が関連することが示唆された。乳幼児期において特に3歳から5歳の幼児後期の子をもつ母親に、児に対する否定的感情の認知に関する育児ストレスが高いことが示された。本研究においては、アート作品制作を3歳から5歳の子と共同で行った母親の育児ストレスと「作品に関する自信」との関連が示唆された。

謝辞

本研究の実施にあたり、講習会に参加し、調査に協力いただきました母親の皆様にご感謝申し上げます。また、講習会の実施とデータ収集に協力いただきました株式会社 petapeta 代表取締役の山崎幸枝氏にご感謝申し上げます。

本論文の執筆にあたり、統計データ解析に関する専門知識を提供して下さった若木宏文氏（広島大学・教授）と小田凌也氏（広島大学・助教）にご感謝申し上げます。

本研究は、広島大学産学官連携推進研究協会産学連携研究・研究会助成事業による助成を受けて実施した。

利益相反なし。